

やぎゅうしんかげ  
すいげつ  
柳生新陰流「水月」の教えとは — 柳生鐔「水月」 —

伊藤 三平

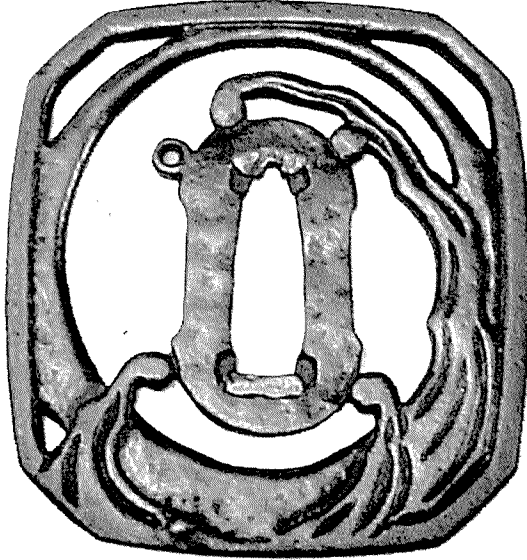
1. 独創的な透を力強く、堂々と

柳生新陰流の劍豪で名高い柳生厳包連也が製作に関与したと伝わる柳生鐔の名鐔で、「肝っ玉が据わっているように力強く、堂々とした印象と美しい錆色」に感激する。

隅切角形（法量・縦73mm×横69mm×耳厚6mm）に造り、その各辺をわずかに外に膨らみを持たせて、ゆったりと見せている。

透文様は柳生新陰流の奥義を踏まえて、連也自身が考案したとされるもので、この図は「水月」とされている。隅切角の枠の中一杯に円弧で月を表現し、そこに波濤を据え、波頭で切羽台を支えるようにデザインしている。波のうねりの筋彫りは力強く、無造作と思えるように鑿を入れている。月の外形も上部は丸線状に、下部は板状に変えており、自在である。独創的というか、あり得ない構図である。月や波濤の透の際にはなるめていいる。劍豪だけに手指が触れる部分に留意したのであろうか。

耳に塊状鉄骨が4箇所出ているに留まらず、表面左下部の耳際に塊状鉄骨をそのまま残し、波飛沫に見立てている。この波飛沫があるからと思うが、切羽台の左上に付けた波飛沫は中抜きにしているのだと連也の遊び心にクスツとする。



地鉄は肌理細かく、ねっとりとした鉛色がかった黒色で強く輝いているが、これが連也自身が工夫した錆付け方法による結果である。

ちなみに連也の鐔作りは、柳生新陰流の秘伝を絵に工夫するように協力絵師（一説に秦國成）に指示し、下地と透彫は協力鐔工に作らせて、最終的な磨きや、錆び付け、腐らし仕上げを連也自身が行ったと伝わっている。

なお、この鐔の協力鐔工は、表面に鉄骨がこのように出た三代山吉兵の鐔を美見したことがあり、三代山吉兵と考えている。

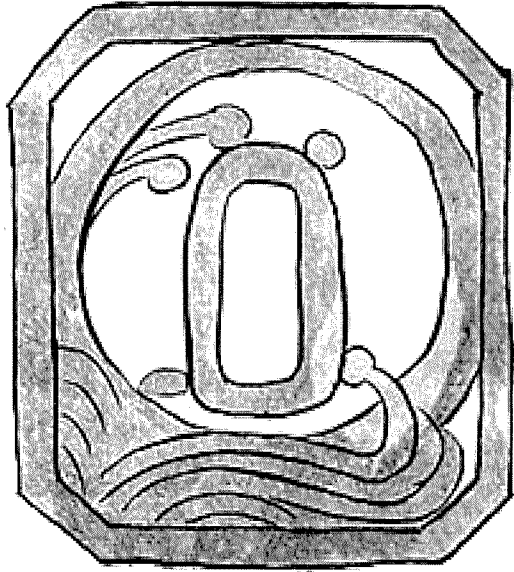
2. 柳生厳包連也

柳生厳包は、尾張藩劍術指南役の柳生兵庫助利敵の三男（母は石田三成の名家老・島左近の娘）として寛永2（1625）年に生まれる。12・13歳頃から劍術で頭角を現し、尾張二代藩主光友の指南役を勤め、尾張の麒麟児とも称されて六百石の知行を賜るが、寛文8（1688）年の44歳の時に役職を辞して二百石と小林屋敷を拝領する。生涯、妻帯せずに武芸に励み、文雅の道にも精進。柳生鐔や柳生拵を考案し、焼き物（瀬戸焼物師弥之助に扶持）にも、庭造りにも造詣があったことの逸話も残っている。元禄7（1694）年に70歳で亡くなるから、連也による鐔の製作は、隠居の寛文8年頃から、延宝、天和、貞享を経て、元禄7年に亡くなるまでの27年間と推測される。要は寛文新刀の時代である。

絵画（水墨画）でも有名な宮本武蔵の鐔は海鼠透かしが大半であるが、柳生鐔は柳生新陰流の秘伝に因む図柄として多様である。共に「一芸に秀でる者は多芸に通ず」である。

### 3. 柳生鐺に関する写本と後代の写し物

藩政期には尾張藩士が熱望した柳生鐺であり、後代の柳生家当主が主導して写し物が作られており、それらは御流儀鐺と言われている。『尾張と三河の鐺工』（岡本保和著）には二期（宝永から文化のはじめまでで柳生厳春の代）、三期（文政から嘉永にかけて柳生厳政の代）のものがあったことが誌されている。また江戸期から押形集が編まれ、当時の数寄者の名前（下方貞久、今泉源内など）を冠して伝わっている。それらを複合した写本・コピーも多く伝わり、私の手元にも2冊ある。そこに所載された当該鐺に似た押形は左図の通りである（笹野大行氏が堀井磊氏より受け継いだ写本資料より）。書き込みによって、この鐺は藩政期の一時期には吉田庄兵衛に所持されていたことがわかる。図にはこのように、時の所有者名が記されていたり、「連也和尚から〇〇へ」と書き込みのあるものもある。また図柄の名称も記されているものがある。図柄の種類は三十六歌仙にあやかった36種が喧伝されているが後世の創作であろう。写本ごとに小異があるが150種類ほど存在する。岡本保和氏は「図柄は新陰流兵法にちなむといわれているが、兵法には無縁と思われる図もまた多い」と記されている。



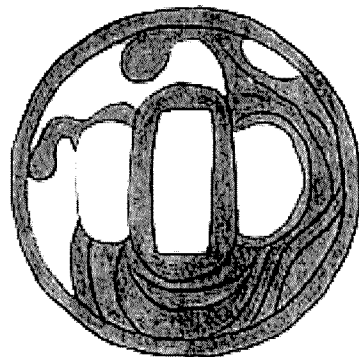
吉田庄兵衛所持

### 4. 「水月」の教えとは

水月

水月

孝徳下画



なお、この鐺の図柄を「水月」としているが、押形集には所持者名（吉田庄兵衛）の記載はあるが、図の名称は記されていない。「水月」という名称は別の押形2枚のそれぞれには明記されている。もっとも右図のように月が波の中にある図は「月陰」と呼ぶとの説も『尾張と三河の鐺工』では紹介されており、諸説があることがわかる。

「水月」という新陰流の奥義を水（波）と月を通して伝えることが大切で、図は幾通りかあったのではなからうか。

そして「水月」の意味として、先人は次のような柳生流道歌を紹介している。

①「立向ふ その目をすぐに ゆるむまじ これぞまことの 水月の影」

（解釈例として「相手との関係を、水と月にたとえて、月がうつるように、相手の隙をとらえよ」）

②「一心 水中の月に似たり 形 鏡の上の影の如し」

（解釈例は「水が月の影を、鏡は身の影を映すのが速やかなるように、人（敵）の心をわが心にうつして勝を制する」）

剣道の達人が到達した境地は、私ごときに理解できないのは当然であるが、同じ柳生新陰流だが將軍家指南の柳生宗矩の『兵法家伝書』が「水月」に触れており、私はその内容に「なるほど」と思ったので紹介したい。尾張柳生と江戸柳生に分かれる前の流祖・柳生宗厳(石舟斎)から伝わったのではなからうか。

なお『兵法家伝書』は『武士道の名著』(山本博文著)でも取り上げられており、そこにこの本は柳生宗矩が將軍秀忠や家光の兵法師範として下間に応えた内容を元に、それを集大成して寛永9(1632)年に成立したもので、上巻を『殺人刀』、下巻を『活人剣』と題し、他に『進履橋』(内題『新陰流兵法之書』)と言う本伝の目録伝書一卷を加え「三卷之書」として修行を終えた高弟に授けるのが通例だったと解説されている。

【進履橋】では「身構」(敵に斬られない用心で、何事にも準備が大切)を強調する。

【殺人刀】では「心構」(治まれる時、乱を忘れざるのが兵法)を強調しており、兵法とは人を斬るものではなく、悪を殺して万人を生かすものとしている。また「機を見る」(その時の相手の気持ち慮ること)も重視している。そして「表裏(はかりごと)」は兵法の根本なり(偽りでも敵を書さずに勝つと、それは真になる)なども説いている。

【活人剣】に「水月」が出てくる。まず『兵法家伝書』から「一 水月 付けたる 其の影の事」から原文を引用すると以下の通りである。

「右、敵と我との間に、凡そ何尺あれば、敵の太刀我身にあたらぬと云ふつもりありて、その尺をへだててててて兵法をつかふ。此尺のうちへ踏入り、ぬすみこみ、敵に近づくと、月の水に影をさすにたとへて、水月と云ふ也。心に水月の場合を、立ちあはぬ以前におもひまふけて立あふべし。尺の事は口伝すべし。」

(注) 「尺」：間合いの距離

「ぬすみこみ」：相手に悟られぬように場を身足で計り、水月の内へとりこむ

「おもひまふけて」：かねてから考えておいて

山本博文氏はこの解釈として、「水月」とは、立ち合いの場における座取り、すなわち身を置く位置のことであると解説する。月の陰が水に映っている時、それに斬りかかっても決して月は斬れない。そのような場に身を置くことを「水月」というのであると解説されている。

そして柳生宗矩は「心をかへす」ことの重要性も説く。この意味は、一太刀打って、打ったと思うと、その心がそこにとどまる。すると一瞬間が生まれ、二の太刀を敵に打たれて負ける。打った後には心をかえしてすぐに相手の気配を見よ。敵は気持ちが変わっているはずである。剣では最初に打撃を与えても致命傷にならないければ相手の反撃を受ける。だから相手を何度も打てとのことである。生々しい分、実戦的である。

また『柳生流新秘抄』と言う書物が『武術叢書』(早川純三郎編)に収められている。この書物は、柳生宗在(柳生宗冬の子で柳生宗矩孫)の門弟である佐野勝舊が正徳6(1716)年に著した新陰流の形の目録の註釈書である。その中に「九箇必勝」という章があり、そこに次のように記されている。「水月と云ふは立相三尺のことなり、互にあたらざる場なり、これを中りかけて行くことを越すと云ふ也、越すところ様々あり、懸待有を以てこす、敵のあそびをこす、遊びと云ふは働きの抜くところなり、移りうつす真の水月などと云ひ、向上の習ひあり」

(注) 「懸待有を以てこす」：正確な意味は私にはわからないが「懸待一」如(攻撃と防衛を表裏一体で備えること)という言葉がある。

「水月」で表現される座取りの大切さを頭で理解しても、具体的なことは「口伝」であり、実践できるまでには「向上の習い」が必要なことが言うまでもない。